

■ 母校を41年ぶりの全国大会（花園）に導いた甲南高ラグビー部監督

くほその
窪園 壮吾さん



母校の甲南高ラグビー部を四十一年ぶり四度目の全国大会（花園）に導いた。

「選手は最後までタツクルにいき、よく頑張った。何とも言えない気持ちだった」と一点差での念願成就に目を潤ませた。

ふだんは、落ち着いた口

調。「昔からそう言われて、実年齢より上に見られます」という三十四歳。動じることがない理由を「自分の頭の中で分析して、落ち着ける状況に持っていく」と話す。

「いいプレーをする選手

は、いいポジションにいる。

かお

いいポジションにいるには準備をしないといけない。試合ごとの修正点や次の試合へのフォーメーションを書き込んだノートは六冊目になり、使い込んで破れたページもある。

伝え方も工夫する。ふつろにしゃべるだけでは、選手の理解度が落ちる。試合のビデオを見せ、映像で説明。選手の意見も入る部誌「甲南魂」を週に一回のペースで出し、文字にして再確認。意思統一を図る。

赴任八年目。学校創立百

子どもたちにステップアップさせてもらった

周年に花を添えた。「八年間の積み上げ。一年、一年子どもたちにステップアップさせてもらった」と、卒業生にも感謝する。

花園に向けては、内村拓主将が試合直後にテレビカメラの前で話した「（県予選で）勝ってきた相手チームのために恥ずかしくないプレーをしたい」という言葉をひいて、「自分よりいいコメントを言った」と笑った。

甲南高、福岡教育大でラグビー部主将を務めた。鹿児島市に妻志保さん、二人の娘と住む。

（運動部・角倉貴之）